

令和5年度 学力向上指導改善プラン

志手原学校長 山本 克之

学校教育目標		自ら学ぶ意欲と方法を身につけた心豊かな志手原っ子の育成		4月		2～3月		
推進主体		学力向上委員会		成果となる目標		年度末評価		
学力に関する前年度の状況・経年の課題等				学力向上に向けての重点的な目標		具体的な行動目標		
				(指標となる数値等)		(成果目標達成のための具体的な手立て等)		
						今年度の成果と来年度に向けた課題等		
						評価		
学 力 の 状 況	全国学 力・学習 状況調 査結果 の状況 (国語、 算数・数 学に関する 個別調 査の結果も 含む)	国語	○知識に関わる問題の定着が高い傾向がある。 ○話しが伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えることができる。 ○登場人物の相互関係について描写を基に捉えることができる。 ○学年別配当漢字に定着が見られる。 ○問題形式を見ると、「選択式」、「短答式」に比べて、「記述式」に苦手傾向があると考えられる(以下2点)。 △互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめることが難しい。 △人物像や物語の全体像を具体的に想像することが課題である(物語の主題を考えること、「読むこと」領域が苦手である)。	○文章を要約する力の向上 ○根拠を明確にした論述する力の向上 ○語彙力の向上 ○話し合い活動などコミュニケーション能力を高める学習の充実	○実生活の様々な場面に応じて、論理的に書いたり、考えを伝えたり、言葉を適切に活用することができる。 ○教科書の各単元末にある言葉の力を適宜活用し、授業の中で、書いたり、話したりする機会を多く設け、習熟を図っていく。 ○登場人物の相互関係や心情・場面についての変化を読み取り、文章を読んで考えたことについて、交流したりする学習活動を学年の発達段階に応じて取り入れていく。 ○学校図書と連携し、学習内容だけでなく読書習慣や多読につなげ、学校図書館を活用した学習を進める。 ○対話的な学びの場を取り入れた授業構成を定着させる。(ICTの活用含む) ○めあて・自力解決の方法・ふりかえり等のノート指導を行う			
			算数 数学	○「図形」(プログラミング的思考を含む)や「データの活用」の領域において、学習の定着が見られる。 ○問題形式に関わらず、全体的に正答の割合が高い。「選択式」や「短答式」に比べ「記述式」の正答の割合が高い傾向がある。 ○計算だけでなく、求め方や答えを記述で示すような思考する問題の正答も高い傾向がある。 △百分率で表された二つの数量関係における割合を分数で表す問題に苦手が見られる。 △示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を複数の考え方を用いて考察することが苦手である。	○図やグラフなど資料を基に考える力の向上 ○解答の根拠(式の意味等)を説明する力の向上	○実生活の様々な場面において数学的な見方・考え方を働かせて問題解決に活かすことができる。 ○目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決をする学習を進める。また、問題解決に至る過程を説明する機会を設ける。 ○テスト後には、誤答を解説して直しをさせることで児童一人一人が自分の間違いを認識し、次の機会の誤答を減らすことができるようになる。		
			ICT機 器を効 率的に 活用した 取組 状況	○ICTを活用した授業では、動画、写真、プレゼンテーション、大型テレビなどの活用が多く見られた。中でも「児童が映像で活動を振り返ること」や「自分や仲間の考えをまとめて伝えること」活動が学習に効果的であると感じている。 ○1年生からiPadを活用することで、子どもたちのiPadの操作がスムーズになり、情報の収集・整理・発信ができるなど情報活用能力の高まりも感じている。 ○朝の会や夏休みの課題、休みの児童対応、学校行事など効果的と考えられる様々な場面でICT活用が増えている。	○ICTを効果的に活用した授業づくりの推進 ○情報活用能力の向上	○課題を解決するために、授業や学校行事等でICT機器を目的に応じて適切に活用することができる。 ○キーボードの文字入力やインターネットの情報の検索、映像編集等、目的に応じてICT機器を操作できるように、発達段階を考慮しつつ低学年から授業で活用する機会を設ける。 ○学習に効果的なアプリケーションの活用など、各教科の学習課題を達成するために活用できるICT教材を検討し、児童が使えるように指導していく。		
	定期テスト、単 元テストなどによ る状況(各教科)	○どの教科も基礎的に力は付いてきている。 △知識だけでなく、様々な情報や条件から思考する問題には苦手意識を持っている児童も少なくない。	○漢字の使い分けができるようになる ○思考力を問われる問題に対して、情報や条件から考える力の向上	○前の学年までの配当漢字を9割程度理解することができる。 ○学習課題に応じた解決方法を考え、取り組み方法ができる。 ○ノートや宿題などの字を児童が振り返る機会を設ける。	○テストやプリントなどの学習後に誤答を直しをさせることができる。 ○国語や算数などの学習課題について、根拠を基に解決方法を考える習慣をつける取り組みをする。			
	授業等からうか がえる状況(各 教科)	○漢字の学習では、書字を丁寧に書く意識が高まっている。 ○課題に対して、粘り強く取り組むことができるようになってきている。 △漢字の習得や書字を丁寧に書くのに、困難を示す子どももいる。	○漢字の活用や丁寧な書字などのノート指導	○丁寧な字を書くことを心掛ける児童を増やす。				
	学 力 向 上 に 関 係 等 の 学 習 状 況 調 査	全国学 力・学習 状況調 査の頁 問紙の状況	△読書に対する興味が高いとは言えない。 △国語の興味が高いとは言えない。 ○学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと感じている児童が多い。 ○学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。 ○学習した内容について、分かった点や良く分からなかった点を見直し、次の学習につなげようとしている。 ○生活における規範意識は高い。	○苦手な学習に対する抵抗を少なくする	○様々な教科で「自分の意見や考え」に自信をもって話することができる児童を増やす。 ○学習面でのきめ細やかな支援・指導で、「自分に得意なところがある」と自信をもって言うことのできる児童を増やす。	○低学年から少しずつ発達段階に応じた学習に取り組む。 ○算数や国語など様々な教科において、つまづきがある児童の支援に取り組む。		
	学 校 評 価 の ア ン ケ ー ト 調 査 に よ る 児 童 ・ 生 徒 の 状 況	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	○行事(運動会・音楽会)への意欲や達成感が高い ○授業に対して前向きである ○友だちとの関係を大切に考えられている △学校以外で自主的に学習をすすめることは難しい	○家庭学習の手引きの活用	○家庭学習の手引きを活用して家庭での学習をすすめていくことのできる児童を増やす。	○宿題や自主学習などの家庭での学習を定着するように取り組む。		
	校 内 研 究 状 況	校内研究の状況	○ICT機器を活用し、児童の思考が深まり互いにつながり合う環境づくりを行っている。 ○児童のプログラミング的思考を育成するために、生活・総合的な学習の時間で様々な教材を用いて授業づくりを行っている。	○プログラミング的思考を育成する ○ICT機器を活用し、児童の思考を深める	○学習課題を達成するために、適切にプログラミング的思考を働かせることができる。 ○児童が目的に応じたICT機器の活用ができる。	○プログラミング的思考を主体的に働かせるための思考を働かせることができる。 ○プログラミングの学習課題(目的)を設定したり、様々な魅力ある教材を活用したりする。 ○ICT機器を効果的に活用する学習課題を設定し、活用する場面を増やす。		
	研 修	校内研修の状況	○プログラミング教育等の研修に、外部から講師を招き、授業づくりへの助言を頂いた。	○ICT活用やプログラミング教育の在り方についての研修をする	○プログラミングやICT機器を活用した授業づくりができる。	○プログラミングやICT機器を活用する授業に取り組む。		
	家 庭 ・ 校 種 間 連 携	家庭・地域等の状況	○放課後に運動場で集まって遊ぶ児童が増えている。 ○学校運営に協力的であり、PTA役員を中心に新しい学校や行事の在り方を考えている。	○行事での地域・保護者との連携協力 ○子ども・保護者・地域・学校にとってよりよい行事の数や開催の形の検討	○行事で意欲的に取り組み、達成感を感じることができる。	○行事の回数や内容の検討を行う。 ○子どもたちの日々の練習を評価していく。		
	小・中における教科連携等の状況	○自然学校は小野・母子・志手原、修学旅行は小野・志手原で合同実施し、上野台中学校区と連携して行事を行った。 ○上野台中校区の6年生で中学校に向けての事前交流会を行った。	○学力向上に向けた小中、小中連携	○上野台中学校区との交流を実施する。 ○中学校との連携を図っていく。	○児童・生徒の様子を交流し、校区の状況を把握するとともに児童生徒理解に努める。 ○6年生を中心に、児童の課題や実態について中学校と交流の場をもつ			